

# 京都と神戸ステーションの音楽教育史

——アメリカン・ボード日本ミッソン音楽教育史 その二——

安 田 寛

## 一 京都ステーションの音楽教育

### E・T・ドーンとL・W・メーソンの音楽掛図

一八七五年十二月六日、日本に着いてまだ間もないドーン宣教師は、音楽教育に活動分野を見つけ、神戸からボストン本部の財務担当のワードに宛ててさっそく次のような手紙を書いた。<sup>(1)</sup>

「当地に到着してから、音楽のこと、音符で音楽を教えることについてたくさん話しました。もしも音楽掛図、メーソンのものを言っているのですが、それがあれば、教えることがとても楽になるでしょう、と話しているところです。私はポナベで一セット持っていました。掛図は第一と第二の二巻で揃いです。ミッソン会議はずっと開かれませんが、このような教材をあなたに正式に頼めません。近く郵便が出發する時、ボードにすぐにこれを送ってくれるように頼んではいけないうか。二巻一セットで、各五ドルだと思えます。多分、ヒューチンス氏がそれを安く手に入れてくれるでしょう。私の経験から言えば、掛図は音楽を教えるのになくてはならないものです。この学校で

も常に役立つでしょう。」

「追伸、私が話した音楽掛図はウイリアム・メーソン博士<sup>(2)</sup>のもので、できるだけ早く入手できれば嬉しいのですが<sup>(3)</sup>」

ドーン宣教師はホワテイング・メーソンをウイリアム・メーソンと混同しているが、やがて京都に届けられるホワテイング・メーソンの音楽掛図は、この後、文部省にも音楽教材として採用され、日本の唱歌教育に大きな影響を与えたことはよく知られている。

翌年一八七六年一月七日にクラークからドーンに好意的な返事が届いた<sup>(4)</sup>。

「私の事務員にあなたが言っていた掛図を探すように指示する。掛図は郵便で送るか、あるいはレーヴィットに持って帰ってもらおう」

この返事に関連してクラークは、注目すべき音楽観を披瀝している<sup>(5)</sup>。

「音楽についてのあなたの意見を心に留めておく。この問題についてかつてグリーン氏が語ったことがある。あなたが注目している通り、日本人の心の欲求に適うように曲をいくつかアレンジできればよいと思います。真実を受け取る用意をさせる時、たくさんの方に及ぼす音楽の力に大きな信頼をおいています」

はじめに述べたように家庭でも音楽を楽しんでいたクラークが、本来の宣教活動にとっては付随的なものと見られる音楽教育に理解を示したことは、ミッションの、さらには日本の音楽教育にとっては幸いであったと言うべきであろう。

ドーンは京都博覧会の開催日であった三月十五日まで京都に滞在する許可を得た<sup>(6)</sup>。博覧会の期間に限って、外国人が百日間、京都に滞在することが許可されたので、ドーンはとりあえず六月まで京都に滞在することができるよう

になった。博覧会開催中の外国人の京都滞在はミッションが京都に活動の足がかりを得るためにたびたび利用された。<sup>(7)</sup>

ドーンがクラークから返事をもろう少し前、一月三日には、京都を開拓したデイヴィス宣教師宅で新島襄は山本八重と結婚式を挙げた。デイヴィスは、新島の「妻は信仰を告白し、一昨日、大勢の日本人の前で洗礼を受けました」とクラークに書き送っている。<sup>(8)</sup>三月一日、デイヴィスの熱心な要請によって自身の女性宣教師、A・J・スタークウエザーがサンフランシスコを出発した。<sup>(9)</sup>彼女は四月七日に神戸に着き、十日に京都に入った。新島と結婚した八重は、四月に自宅でドーン夫人とともに女子塾を開いた。<sup>(10)</sup>塾でドーン夫人が歌を教えた。<sup>(11)</sup>スタークウエザーは後にこの塾を吸収し、デイヴィス邸に京都ホームを開設した。<sup>(12)</sup>これが後の同志社女学校であり、音楽の面言えば、音楽教育の先進地の一つになってゆく。<sup>(13)</sup>

三月六日の日本ミッションの特別会議は、京都のために Mason & Hamlin オルガンの購入を諮問員会に請求することを決定した。<sup>(14)</sup>これを受けてデイヴィスは、十四日付で「京都のために頼んだオルガンについて言いたいことは一つだけです。九ストップのものは欲しくありません。とても壊れやすいからです」とさらに詳細な注文をクラークに書き送った。<sup>(15)</sup>二十日にはギューリックも京都にオルガンが必要だと、念を押している。<sup>(16)</sup>

帰国していたレーヴィットがこの頃に日本に復帰したので、おそらくクラークの手紙にあったように携えてきた掛図を彼がドーンに渡したのである。当時、同志社で英語を二時間教えるかたわら、一時間と十五分音楽を教えた。<sup>(17)</sup>ドーンは、三月十八日にクラークに掛図の礼状を書いた。<sup>(18)</sup>

「音楽掛図を送ってくださったことに感謝いたします。ただ、十五ドルという値段には少し驚いています。というのは、ドーン夫人が W・メーソン氏の掛図を買ったときは、五ドル当てでしたから」

ドーンの音楽教育の評価について、この年の京都ステーション報告<sup>(19)</sup>が簡単であるが、次のように賞賛した。  
 ドーン氏は「音楽を教えることにおそらく日本で最初に成功した。その結果、数カ月前まで市長がいた建物の壁には、今では毎日キリスト教の讚美歌が反響している」

このようなミッション側の評価に対して、授業を受けた当の学生は、「われわれは一から十までハワイかカリフォルニアのような未開地であって学んでいるような気がして、同志社の空気は日本国の空気がいかなる宗祖以来歴史的の都の空気を呼吸しているとは、どうしても思われなかつたのである」と回想している<sup>(20)</sup>。しかし、ドーンによってミクロネシアの歌唱教育がそっくり京都に移植され、これが後に文部省の唱歌に大きな影響を与えることになるのである。

### 京都での礼拝の広がり

ボストンでは五月二日、諮問委員会が京都にスミスアメリカン社のオルガンを送ることを承認した<sup>(21)</sup>。翌日、クラーク書記はそれをデイヴィスに知らせた<sup>(22)</sup>。

「オルガンは荷造りしから、すぐに発送されます。メーソン・アンド・ハムリンの代わりにスミスのものを一台あなたに送った。理由は単純で、スミス氏はオルガンを半値で提供してくれるからです。それに領収書は五百ドルのものを送ってくれる。彼はこういうやり方でボードに貢献してくれるのです」

京都ステーションでは宣教師たちの予想に反して、彼らがオルガンを切望するほどまでに日本人の間に讚美歌が浸透してきた。その様子を五月十日付スタークウエザー書簡に読むことができる<sup>(23)</sup>。

「今のところ、礼拝が許されているのは宣教師の家だけです。(中略)ドーン牧師は、市の別の区域にある彼の家で、日曜日は毎朝祈禱を行っており、夕方には日本人の祈禱会を行っています。新島氏は、彼の人々にとってのジョゼフ

ですが、午後には礼拝を行っています。この前の日曜日、彼らが日本語で“Today the Saviour calls”を歌うのを聞いたとき、どんなに感動的だったかあなたは想像できないでしょう。私たちになじみの深い讃美歌がかなり日本語に翻訳されました。日本語で作られた他の讃美歌も私たちの大切な曲に付けられました。「エス我を愛す」はとくにみんなが好きです。不慣れな人達に讃美歌を指導する手助けをすることが出来て幸せです。最も人気がある讃美歌は、トクさんが書いたものです。彼女は士族出身ですが、今は落ちぶれて、デイヴィス師一家の召使いです」

ところで、京都で最初に礼拝がおこなわれたのは、前年一八七五年の九月で、新島襄が新島丸通りの借家に移り、日曜礼拝をはじめた。十月十九日に京都に定住したデイヴィスは、二十四日に自宅で最初の礼拝をおこなった。翌年七六年になると、三月末にドーン夫妻が、竹屋町に借家を構えるとさっそく日曜礼拝に着手した。ラーネッドは五月十六日に借家に移り、十一日の日曜日の夕方から礼拝をはじめた。こうして、新島邸、デイヴィス邸、ドーン邸、ラーネッド邸の四つの伝道所が開設され、デイヴィス邸の礼拝開始時刻は午前九時半、新島邸は午後三時、ドーン邸とラーネッド邸は午後七時であった。<sup>(24)</sup>

こうした礼拝の広がり、音楽史の面から言えば、讃美歌の広がりの意味した。そういった面をスタークウエザーは九月十四日に次のように書いている。<sup>(25)</sup>

「日曜日の午後、日本人の礼拝がわたしたちの教師によって進められた後、私たちは英語で歌い、祈るために集まりました。わたしたちが新しく届いたゴスペルソングからいくつか、あるいは長い間親しんだ古い、古い歌を歌った時、これは本当ですが、大地には耳慣れない旋律が響きわたりました」

十月二十四日、スタークウエザーは新島邸の女子塾を吸収し、デイヴィス邸に京都ホームを開設した。寄宿生四人と通学生八人で、全部で十二人の生徒が毎日授業を受けるようになった。<sup>(26)</sup>

「彼女らが歌と祈りを学び、日本の少女と婦人を待ち受けている未来に彼女たちを適合させるための日課に向かう時の声をもしあながお聞きになれたら、あなたは私の喜びがお分かりになり、わたしたちがすべての奉仕に対してすでに豊かな報酬を得たことをお感じになるでしょう」と、スタークウエザーは小さいながら女学校の順調な発展を伝えた。<sup>(27)</sup> 他方、クラーク書記は、スタークウエザーの学校を「アメリカン・ボード伝道の砦として、京都に他の教派の進出を寄せつけないようにすべき」と、ラーネッド宣教師に教派意識をあらわにした書簡を十二月二日に送っている。<sup>(28)</sup>

#### オルガンの到着とスタークウエザーの女学校

一八七七年一月十五日、デイヴィスはクラークに、「私たちはここ京都で一般の祈禱集会による祈禱の一週間を観察しました」と報告した。

最初、日本人はどのようにして讚美歌を歌ったのか、その興味深い様子についてデイヴィス書簡が続けて語る。<sup>(29)</sup> 「このような祈禱会に出席したことはいままでの私の人生にはなかったことです。八十名から百名の出席者があります。彼らは話しもせず、聖書も読まず、ただ祈り歌います。一曲の讚美歌を歌い出すただ一つの方法はアーメンの間で、ひざまずいて歌い出すことです。各祈りの最後に、一人、二人、あるいは四人の声がユニゾンで祈りはじめます」

この頃、学校や教会で讚美歌を歌うことが定着し、京都のミッションではオルガンに対する需要が急速に高まり、オルガンをめぐって本部との間にたびたびトラブルが発生した。三月一日、クラークは、ギューリックに宛てスタークウエザーにオルガンを二重に送るところであったと、不満を述べた。<sup>(30)</sup>

「特別の要請についても一言。ウーマンズ・ボードからの知らせによると、ミス・スタークウエザーはハートフォ

ードの婦人たちにオルガンを頼んだということだ。彼女らは、当然の義務として、この件をウーマンズ・ボードに相談した。ウーマンズ・ボードはわれわれの保証なしでは、資金について決定することが許されていない。それで要請を私のところに送ってきた。これが十日前のことです。私はすぐにオルガンを送るために注文するつもりで、次の水曜日に諮問委員会に提出する予定の書類の間に要請を割り込ませた。数時間後、サンフランシスコで発行された「太平洋」を手に取り、たまたま気づいたのであるが、サンフランシスコの婦人が、オルガンのための資金を供給し、次の汽船で輸送されることになっていた。新聞をたまたま見たから、オルガンを二重に送らずにすんだし、資金を節約することができた。これは、起こりうる、また度々起こってきたことの一例です。男性からのものであれ、女性からのものであれ、特別の要請はすべて私のところに送るようにして下さい。ボードは本当に必要なものは供給するつもりです」

日本からの度重なるオルガンの要請はクラークをあわてさせたのであったが、三月のはじめにステーションが待ちに待ったオルガンがようやく到着した。

「一年前、京都に頼んだオルガン、スミス・アメリカンが到着したところです。完全な状態で届きました。美しく、永遠の喜びです。スミス氏によろしくお伝えください。彼の寛大のお陰でわれわれはオルガンを手に入れることができたのです」

と、デイヴィスがクラーク宛にオルガン到着の礼状をしたためたのは三月八日のことであつた。<sup>(31)</sup> 本部から最初のオルガンが到着したばかりなのに、デイヴィスはすぐに同志社英学校で使う、安くて持ち運びの出来るオルガンを要求した。

「恐れ入りますが彼に話してくださいるか、彼にこの手紙を送っていただけませんか。四オクターブか四オクタ

ীব半の最も簡素で安いオルガンの値段はいくらでしょうか。われわれのトレーニングスクールで使いたいし、また軽くて持ち運びができるもので、アウトステーションの仕事に持ち運びたいのです。ドーン氏は当地のトレーニングスクールで十人の若者に音楽を教えることによって、この帝国の礼拝の歌唱に大変貢献しました。このような仕事を助けるためや、学校の朝の礼拝に使うために彼にはこのようなオルガンが一台必要なのです。私たちはスミス氏のカタログを持っていません。もし買うことにすればいくらかかるのか知りたいのです。もしも、この手紙を読んで、われわれの必要とそれがわれわれにいかにも助けになるかを知って、スミス氏かまたはボード、あるいは両方が、われわれが次の手紙を書く前に、トレーニングスクールのチャペルのためにこのような簡素なオルガンを一台送る用意があるならば、四ヶ月もすれば届くだろうし、感謝します。しかし、もし、そうでなければ、どうかオルガンの値段を知らせてください。値段を考慮して、可能なら注文します。そして、京都ステーションのための情報に謝感します」

三月二十四日には少しばかりの遺産を手にしたラーネッドが、自宅の集会で使うためだけでなく、自分たち家族の楽しみのために、八十数ドルで京都ステーションと同じオルガンを購入することをヒューチンス氏に依頼にした。<sup>(33)</sup> ラーネッドの購入計画についてクラークは五月十一日に次のように指示した。<sup>(34)</sup>

「昨日、あなたの叔父からあなたに送るオルガン代の支払いのための八十六ドル四十セントの為替手形を受け取った。私はこの日、スミスオルガン会社からオルガンを二台受け取った。一つは小さいサイズで、もう一つは大きなサイズのもので、どちらが欲しいか、あるいはどちらを考えているのかははっきりしない。小さい方はデイヴィスに、大きい方はあなたに、となっている。これは私の考えとは逆です。しかし、発送先を変えることが良いとは思わない。楽器が届いたらいいようにして下さい。あなたが考えている小さい方はポーターブルだと思し、そのように考慮した。小売り価格は百ドルです。それは、あなたに四十五ドルとあとブリキでの梱包代五ドルであなたに提供されます。そ

れで小さい楽器は五十ドルかかります。結局、あなたの高座に手形が振り出され、郵送料他と手数料を払うと、三十六ドル四十セントの残高が残ります。大きい楽器は二百五十ドルのもので、我々には、九十ドルと、あとブリキ梱包のための十ドルで提供されました。したがってちょうど百ドルで、小さい方の二倍です。大きい楽器はデイヴィス氏の訴えによって、京都のあなたがたの学校で使う目的で、日本ミッシヨンのために買ったものです。この問題についてはデイヴィス氏と話し合ってください。あなたがどちらの楽器を選ぼうともジェンクス氏に相談して清算してください。このような手配に満足していただけると信じています。大きな値引きは、オルガン会社有力者の一人で、隣人であわしのよき友人のおかげでできたのです。」

五月十八日金曜日、ラーネッド邸の第一公会でおこなわれた夕刻の礼拝で、ボードから最初に送られて来たオルガンが使われた。公会の近所の人たちがそれに魅せられた様子をスタークウエザーは、次のように述べている。<sup>(35)</sup>

「この人たちは定期的に礼拝が行われているラーネッド博士の家から二、三軒のところにあります。彼らはいつもわたしたちにとっても親切です。でも、集会にはけして出席しません。(中略) 私たちは、熱心な聴衆に「古い、古い物語」や唯一の正しい神について語る祈禱会のために集まりました。彼らは、オルガンに魅せられて、もっと聞くために一人また一人というぐあいに入ってきて来ます。あのオルガンです！ 私が思うに、あなた方ポストンの人達は、無意識にすべてが子供の悪戯であるように見えたとしても、あなた方がそれ(オルガン)がどれだけ貢献したかを知ったなら(でも、知ることは出来ないのですが)、あるいは、もし、あなた方が歌声をおききにさえなれば、私を許してくださいませでしょう。歌声は市の遠く離れた二つの場所で起こります。その場所は、オルガンが来るまでは不調和なうなり声がしていた場所です」

オルガンを欲しがるスタークウエザーの性急な行動によって、オルガンを二重に送る事故を引き起こすところだっ

たというクラークの不満に対して、スタークウエザーは、同じ手紙で東部婦人伝道会のホーム・セクレタリーに次のように釈明した。<sup>(36)</sup>

「ハートフォードの友人たちにオルガンを頼んだことが規則違反だと知って、申し訳ないと思う以前に少なからず驚きました。友人たちを喜ばすつもりであったし、多分ボードにとつてもそのような寄付を受け取ることはよいことだと思っていたからです。楽器が届くまで早くても一年は待たねばならないと思いました。しかし、「彼らが呼ぶ前に、私は答えよう」という約束は、十分に果たされようとしていますので、私達は将来の計画を立てなくてはなりません。

ハートフォードへの手紙をいそいで出したのは、はからずも「太平洋」を手に取ったときでした。ボストンからケープ周りの航路の無駄を考えると、カリフォルニアの友人たちはより近い隣人だと思いませんか。「ワトキンス夫人のオルガン」と「彼女にはもはや必要のないオルガンをどうしたらいいでしょう。新しい使い道はあるでしょうか」というのを読んだとき、私はこの友人に相談しました。「日本で再出発すること」を提案することに何の問題もないことで同意しました。行動が性急だとは思いませんでした」

オルガンに関するスタークウエザーの活躍について、この年の京都ステーションの報告は、「今年度には、また複数のキャビネット・オルガンが京都にやって来た。ミス・スタークウエザーのおかげで、オルガンは十分に活用された」(本井康博訳)と述べた。<sup>(37)</sup> この年の五月までには、京都ステーションには少なくとも二台のオルガンがあったのである。<sup>(38)</sup> それを十分に活用したスタークウエザーは、先の手紙で女学校の一生徒が音楽の才能を開花させている様子を報告した。<sup>(39)</sup>

「お春さんが今、"I am so glad that Jesus loves me"を弾き、英語で歌う。"The Lord is my Shepherd"を日本語で歌っているのが聞こえます。彼女は四月三日にこの学校に来たばかりです。でももうこれらの讚美歌を上手に演

奏し歌います。この手紙があなたに届く頃には、彼女にもっとたくさん教えます」

女学校での讚美歌とオルガンの教育の最初の成果をあらわしたお春さんとは、後に本間重慶と結婚して本間春子となる女性である。伊勢久居の出身の本間重慶は、一八七四年十一月一日に神戸公会で受洗した<sup>(40)</sup>。一八七五年に同志社に入学した。彼から日本語を習っていたスタークウエザーは、本間重慶について期待をこめて次のように語っている<sup>(41)</sup>。

「彼は今私の先生です。彼は今勉学と労働に専念していますが立派な牧師になるでしょう。彼は現在ドーン氏の家の教会で働いています。あなたは、彼をドーン氏の聖書クラスのまっただ中に見かけるでしょう」

その本間重慶は後年、恩師、スタークウエザーについて次のように回想している<sup>(42)</sup>。

「同志社には涙の先生が多くS師は最も善を泣く人で、感じては泣き、同情しては泣き、祈りては泣き、読書しては泣き、讚美歌を歌つては泣く人にて師がオルガンの奏楽中ムーデー、サンキーの福音讚美歌集にある P. P. Bliss 氏の Poetical Son 放蕩息子の悔に改めの歌を奏する時は必らず泣ながら奏樂せらるゝを毎度見受けた。師は實に涙を流して泣く人で師は涙流の人であった」

### ドーンの帰国

本間重慶はドーンに協力して働いていたが、そのドーンは夫人の精神障害のため一年強の滞在で日本を去ることにした。スタークウエザーはドーンがいなくなることを惜しんだ<sup>(43)</sup>。

「親愛なるドーン夫妻、明日神戸を離れる蒸気船が彼らを遠くに連れ去ります。なんて寂しいことでしょう。D氏は若者達にあのように高貴な仕事をされました。彼らは私たち全員の喜びであり祝福です。肉体的には十分に健康な彼ら兩人を去らすのは、不思議な神の摂理です。しかし、彼女の心はああいふ状態なのです」

三月二日、クラークはデイヴィスに、われわれの期待を上回る有能ぶりを発揮したドーンを呼び戻すことは辛いと言い、「彼の真摯なキリスト教精神と実践的感覚は彼の英語と音楽の授業と結びついて、彼を何人とも代え難いものにした」と評価した。<sup>(44)</sup>三月二十六日には、デイヴィスが、ドーンは英語と音楽に関してトレニンングスクールで素晴らしい仕事をし、彼の高貴な基督者としての手本や助言の点でも、ミッションには彼に代わる人材はいない、ということで見解が一致している、とドーンを高く評価した。<sup>(45)</sup>ドーンが日本を去った後の六月十一日の手紙では、音楽を教える才能だけでも、彼は再び日本に来る価値がある、と述べている。<sup>(46)</sup>一八八〇年五月に同志社普通科を中退した河辺久治はドーンについて、次のように思い出している。<sup>(47)</sup>

「非常に音楽の名人でドーンと云う宣教師があった。私は始めて此人から音符に就いて習ったことがある」

メーソンの音楽掛図を使ったドーンの音楽教育を、京都ステーションの宣教師たちは高く評価した。その彼らにも予期できなかったであろう結果をドーンの仕事は日本の音楽教育の未来に招くことになる。それは、一つには、ゴードンがドーンの仕事をメーソンに直接伝えたことと、また一つには、この後すぐにはじまった、文部省の唱歌教材試作がメーソンの掛図を使って行われたことによる。

六月、ゴードン宣教師は、目を悪くし帰国した。そのとき、日本の文部省からの招聘が決まったメーソンに会った時のことを、後年、メーソンを宣教師として派遣するか否かという問題が浮上した折に思い出して、次のように語った。<sup>(48)</sup>

「私は彼に次のような意見を述べた。われわれのミッションの仕事は広く浸透し、絶えず広く浸透しています。もしあなたがわれわれ宣教師と協働しないなら、あなたの仕事は、高い次元で完成し、広く浸透するという結果に達しないでしょう」

一八八〇年三月に文部省の音楽取調掛に赴任したメーソンはその年暮れから翌年にかけて、神戸、大阪、京都を旅行し、アメリカン・ボードの宣教師を訪問した。その時の印象について、大阪ステーションのユルビーは、ポストンのニューイングランド音楽院長トゥルジェーに次のように説明した。<sup>(49)</sup>

「メーソン教授が三年か四年前にわたしたちを訪問されたとき、私は彼の大阪訪問についてあなたに手紙を書くことを彼と約束しました。(中略)当時の彼の訪問は宣教師と多くの日本人にとってとても楽しく、また刺激に満ちたものでした。将来彼から助けてもらえることを楽しみにしていました」

ユルビーが言っているように、一八八一年の暮れに完成した日本語掛図と唱歌本をもって再び京都と大阪の宣教師、パスポート申請のための表現では「友人」を訪問する計画をたてていたメーソンであったが、何かの事情があつて「友人から囑託」のあつた訪問を中止している。<sup>(50)</sup>

京都ステーションのパームリーの次のような回想もメーソンの関西訪問に関連したものだと考えられる。<sup>(51)</sup>

「日本政府に聘せられて初めて外国から来た音楽教師のメーソン教授は私の親交ある人であった。教授は赴任当時より日本の西洋音楽を了解し又それを実演し得べき可能性を有て居る事を認め、且つ然かあらん事を望んで居た」

## 唱歌元年

ボードからの最初のオルガンが到着し、スタークウエザーの女学校では音楽教育の最初の成果が現れ、音楽に熱心であつたドーン宣教師が日本を去つた一八七七年という年は、日本の唱歌にとつて、いわば「唱歌元年」と言つていい年であつた。文部次官の田中不二麻呂は前年にフィラデルフィアの万国博覧会に出席し、出品されたメーソンの音楽掛図について情報を集め、唱歌の導入に向けて本格的に動き出した。<sup>(52)</sup> 一八七六年二月一日、田中不二麻呂は、

留学生監督官としてアメリカにいた目賀田種太郎の見送りを受けて帰国した<sup>(53)</sup>。田中を見送った目賀田が唱歌導入へ向けての実際の仕事に当たることになった。彼は、一八七七年の一月四日に、田中不二麻呂の承認を得て、事務の便利と教育の中心地であることを考えてニューヨークからボストンへ転居した<sup>(54)</sup>。三月三〇日、文部省学務課は、目賀田から依頼のあった「日本各種の歌類取り集め」を式部寮に照会した<sup>(55)</sup>。四月一九日には、学務課は、やはり目賀田からの依頼を受けて、海軍省に「君が代」の西洋楽譜を請求した<sup>(56)</sup>。二十六日に海軍省は、学務課に君が代の楽譜一通謄写して送った<sup>(57)</sup>。

日本から資料を取り寄せながら唱歌教材の作成に着手した目賀田は、七月二十五日から八月二十二日まで開かれた、ニューイングランド音楽院長トゥルジェーが主催する夏期師範学校講座に留学生の伊沢修二を連れて参加した。彼はそこで、メーンソンが担当した講座「公立学校声楽教育」のための教科書、『音楽掛図第二巻及び音楽読本第二巻入門』を翻訳した。これは、音楽掛図第二巻の速成用の教科書で、その中にあった歌詞の付いている教材を選び、歌詞を日本語に翻訳したのである。こうして目賀田種太郎は、日本語の歌詞によるメーンソンの音楽掛図を作り上げた。これが後の文部省の音楽掛図、唱歌集のもとになったのである<sup>(58)</sup>。

日本の唱歌の源流の一つである保育唱歌が誕生したのも一八七七年であった。アメリカでの唱歌の試作に対抗するかのように、日本では、東京女子師範学校の附属幼稚園が独自の唱歌を作り出そうとしていた。九月、東京女子師範学校撰理中村正直が宮内省式部寮式部頭宛てに唱歌遊戯の作曲を依頼したのであった<sup>(59)</sup>。中村正直は、かつて、横浜のミッションスクールの生徒募集活動を支援したり、自分の娘を入学させたりした人物であった。附属幼稚園では、伶人と呼ばれ宮内省の楽人によって新たに作られた唱歌を使った授業が、十一月六日からじまった<sup>(60)</sup>。その時に使った伴奏楽器はピアノと和琴と拍子をとるための笏拍子で、保育唱歌の伴奏は和洋折衷式で行われた。二十七日に幼稚園

の開業式があり、このとき『風車』と『冬燕居』という唱歌遊戯が公開された。<sup>(61)</sup>

さらに京都府でも独自の唱歌が誕生しようとしていた。京都女学校（現京都府立鴨沂高等学校）のカリキュラムに、週三時間、絃歌が加えられたのが、やはり一八七七年の三月のことであった。<sup>(62)</sup> 絃歌というのは京都府方式唱歌とでも言うべきもので、在来の地唄の曲をそのまま使い、歌詞を教育的に改良し、筑紫箏を使った唱歌であった。翌年の十月二十二日、京都府学務課は京都女学校編「唱歌」一篇を出版することになる。<sup>(63)</sup>

こうして京都では学務課方式の地唄改良唱歌と日本語讚美歌という唱歌が並び立つことになるのであるが、同志社女学校に新しい女性宣教師が着任した。先に紹介した一八七七年五月十九日の手紙の最後でスタークウエザーは、新しい女性宣教師の到着を心待ちにしている女生徒らが「The Lord of the World is Jesus やその他の珠玉の数々を日本語と英語で歌っているのお聞きになればあなたはきっと喜びになられるでしょう。Hold the Fort が日本語で歌われると新鮮です。長く歌われることでしょう」と紹介して、手紙を閉じていた。<sup>(64)</sup> ウイルソン（Miss Julia Wilson）が神戸に着いたのは十月六日で、八日に京都に入った。<sup>(65)</sup> 彼女は、毎日英語を一時間教るかたわら、音楽を二時間教えた。こうして女学校の音楽教育はさらに充実していった。ウイルソンはまた新島邸の礼拝について次のように紹介した。<sup>(66)</sup>

「日曜日に教会に行きました。それは新島邸での集会です。そこでわたしが演奏するためにミス・スタークウエザーは彼女のオルガンを運んでくれました」

### 再びオルガンの到着

一八七八年になると、二月、前の年の五月にクラークからラーネッドに宛てた手紙で話題になっていた二台のオル

ガンが京都に到着した。二月十日日曜日の午前、新町公会でポストンから送られてきた小さいほうのオルガンが披露された。この年の京都ステーションレポートは、「以前、ドーンの旧宅で開いていた第三教会は、大変な困難と反対の中で昨年の九月に市内の真ん中にチャペルを一軒、借り受けました」と報告した。<sup>(67)</sup>つまり前の年の九月九日に第三公会は、「旧ドーン邸から新町三条上ルの民家（田中源太郎の持ち家）に移転し、「新町公会」と改称」したのであった。<sup>(68)</sup>この新町公会にポストンからのオルガンが運びこまれた喜びをスタークウエザーは次のように書いている。<sup>(69)</sup>

「この前の日曜日の午前中に、市の中心にある礼拝場で、あなたが送ってくれたポータブルオルガンを披露する喜びを持ちました。私たち全員どんなに感動したことでしょう」

日曜日には新町公会に運ばれたオルガンは、週日は、同志社英学校の礼拝室に設置され、毎朝の礼拝でパームリーが弾き、宗教歌を歌う百人の若い学生の声を訓練するのに役立っているとデイヴィスは報告している。<sup>(70)</sup>

送ることが約束されていた二台の内、大きい方はラーネッドに届けられた。二月十九日の手紙でラーネッドは、待ちに待ったオルガンが無事到着した喜びを、音楽の趣味が一番に優先されるような宣教師の家庭を大いに明るくしてくれる、と表現した。<sup>(71)</sup>その一方でラーネッドは、日本人の歌唱に辛辣な批評を述べている。<sup>(72)</sup>

「わが家のように礼拝所と兼用している場合を除いて、私たちの礼拝所にオルガンを備え付けても期待はできないように思われます。ボードは、あらゆる教会の礼拝所にオルガンを備えることまで責任を持つ必要はないと思います。日本人の集会でオルガンが助けになることに關しての私の評価は、かなり低くなりました。もしもこの教会が私たちの家から移転しても、オルガンをそこに移したいとは思わないでしょう。日本人が今よりずっとたくさん歌を覚えるまで、日本人にオルガンを弾くように勧めることは賢明とは思いません」

春さんがオルガンに進歩する度に喜びを手紙に書いているスタークウエザーの態度とは対照的なラーネッドである

が、それは、ラーネッドが音楽に高度の趣味を持っていたためとも見られる一方、日本人の音楽の進歩は、女性宣教師の忍耐強く、寛容な指導に多くを負っていたことの間接的な例示ともみられる。

ドーンが去ったあとと新町教会を主宰していたのは本間重慶で、オルガンに格段の進歩を示した婚約者の春がそこでオルガンを弾くことになる。その当たりの事情がスタークウエザーの先に紹介した二月十六日に書簡に次のように書かれている。<sup>(73)</sup>

「この場所を得るために困難に直面していることについてあなたはお聞きになっていられるでしょう。私の教師である仮牧師の指導のもとに教会員はそれを獲得するために辛抱づよく、ずっと働いています。彼の婚約者は昨年の四月からここで学び、熱心に真理を吸収していますが、彼女が将来そこへ行ってオルガンを弾いてくれるでしょう。彼女は感心するほど進歩しました」

スタークウエザーの希望通り、この後すぐ、春は新町教会でオルガンを弾くようになった。

春は「大勢が集まる市の中心にある礼拝所で彼らのためにオルガンを弾きます。彼女の信仰は鮮やかな証人です。彼女のように上手に歌い演奏するには、他の人であればもっと時間がかかるでしょう。異教の婦人の可能性に対する彼女のような証人は、十の説教、いや百の説教の値打ちがある」とスタークウエザーが激賞したのは、三月十六日のことであった。<sup>(74)</sup>

それからおよそ一週間後の二十三日、文部次官の田中不二麻呂は東京大学で「唱歌奏楽は教育の為メニ欠ク可ラサルヲ論ス」を講演し、小学校で唱歌を始める決意を披露した。<sup>(75)</sup>この後、四月二十日付で米國留学生監督官の目賀田種太郎がメーンソンの掛図の日本語版試作の成功を田中宛に報告し、六月十八日に伊沢修二は文部太輔に四月八日付の書簡を添えて、ようやく日本語掛図を進呈した。<sup>(76)</sup>ここに、ミッションの教育に遅れること久しく、文部省の唱歌教育が

実現に向けて急ピッチで始動しはじめたのである。文部省が唱歌教育実現の決め手として、アメリカからメーンソンを招聘した。そのメーンソンは、自分の事業の先駆的手本として京都、大阪、神戸の日本ミッシヨンの讚美歌教育を強く意識していたのである。

さて、春以外の女生徒も新町教会でオルガンを弾いたことをスタークウエザーは七月二十六日の書簡でこう語っている。<sup>(77)</sup>

「お菊さんが京都ホームに來たのは一年前の一四歳の時でした。始めて聞いたキリスト教の教えをすぐのみにみこみ（中略）今では真の信仰を身につけ様々な方法で役立っています。市内中心部の教会の集まりで、ほとんどの讚美歌を上手に歌い弾いてくれます」（坂本清音訳）

菊は、一八八四年に邦語科を卒業する高畑（西村）菊で、滋賀県から入学したこの頃であろうか、彼女は、「唱歌は小学校にありませんので、始めて讚美歌を歌はせられました時、仮名ばかり書いてありましたので、人は変な節をつけて歌って居りますが、私にはそんな事は出来ませんから唯棒読みに読み終って、後は無言で居りましたが、それでも自分が一番先きに読み終ったので誇の様に思はれました」と、ユーモア溢れる回想を残している。讚美歌を歌うということが全く理解できなかった菊が、入学一年後には、「ほとんどの讚美歌を上手に弾いてくれる」ほど進歩を示したのである。<sup>(80)</sup>

オルガンを弾いた春や菊以外の女生徒も礼拝に参加し、讚美歌を歌った。彼女たちの雰囲気について、一九八八年に同志社普通科を卒業した湯浅一郎は次のように回想している。<sup>(81)</sup>

「女学生が爾々と行列を作って無言で公会堂へ行く様子は、葬式の行列の様に思はれて、会堂へ行っても男学生の間に入って一緒に讚美歌を唱うが、僧と尼との様で、女学生の当時の有様は娑婆の人では無い様に思はれた」

教会の運営の中心であった本間重慶はドーンの音楽教育の改良に熱心であった<sup>(82)</sup>。スタークウエザーにオルガンの薫陶を受けた彼の婚約者、春や菊が教会でオルガンを弾き、他の生徒も礼拝に参加して讚美歌を歌うといった様子に、京都ステーションの音楽教育の有機的進展を見ることが出来る。

女学校には、新潟のパーム宣教師から派遣され、音楽を学ぶために入学した陶山たせのような女性もいた。たせは八月には夫とともに新潟に呼び戻された<sup>(83)</sup>。新潟の教会でオルガンを弾くたせの姿が想像される。

## 二 伝道と讚美歌の広がり

### 岸和田伝道

岸和田伝道の開始のきっかけは少し変わった事情による。それは、マサチューセッツ州スプリングフィールドに留学中の岡部長職が郷里の岸和田で伝道してくれるようにとの依頼状を新島裏に発送したことによる。岡部長職は和泉国岸和田最後の第十三代藩主であった。依頼を受けた新島は、一八七八年七月二十日に岸和田に赴いた。八月には山崎為徳はか多数の同志社の学生が伝道にやってきた<sup>(84)</sup>。音楽の面で注目したいことは、七一雑報の伝える次のことである<sup>(85)</sup>。「生徒滞在中は、集会毎に出掛讚美歌を謡はれしに由余程集会の助けとなり、殊に、亀山氏は、時習社の生徒衆へ、讚美歌を教授されたり云々」

亀山昇ほかの同志社の学生が伝道のための集会で讚美歌を指導したという事実、ドーンによつてはじめられた讚美歌教育の岸和田への広がりを見ることが出来る。

岡部は沢山保羅にも同じような依頼状を発送したらしい。十月二十八日には大阪から沢山保羅も伝道にやってきた。

彼は十一月五日にも妻たかをともなつてやつてきた。たかは女性たちに聖書の説明をしたり、讚美歌を教えた。<sup>(86)</sup> 沢山と結婚する以前の増尾(田島)たかは神戸英和女学校生徒で、岸和田に来る前年、一八七七年十一月四日に神戸公会で受洗した。<sup>(87)</sup> 十二月二日には大阪のグールディと新島夫人とが岸和田を訪れ、七一雑報の伝えるところによると、<sup>(88)</sup> 「直様十二、三人の処女来りしかば、夫より讚美歌をおしえしが始にて、追々男児も集まる様になり、午前も午後も讚美歌をおしへ、其他は自由社にて説教されたり」とのことであつた

翌年の新島夫人の伝道について、スタークウエザーは、次のように報告している。<sup>(89)</sup>

「新島夫人は休暇に二人の生徒を彼女らの郷里の岸和田につれてゆきました。覚えていらつしやると思いますが、そこは、スプリングフィールドに留学した若い元大名の郷里です。彼は郷里に説教師を送ってくれるように望んでいます。二人の生徒は人々に説明したり、話したり、また歌唱にとても役に立ち、新島夫人はとても喜んでいます。彼女は九月に学校に入りました。彼女らは英語で、"The Light of the World is Jesus," "Come to Jesus" なども歌います。彼女らは歌うことが好きで、仲間と楽しんでます。少女の一人は十歳で、とても小さくやせています。(中略) 彼女らは戻ってくる時二人の新しい生徒を連れてきました。」

こうした岸和田伝道に、伝道の広がりとともに讚美歌が拡がってゆく様子の典型を見ることが許されよう。讚美歌も教えた同志社の学生の伝道によって、二人の女生徒が同志社女学校に入学し、その生徒が郷里の伝道での歌唱指導に効果を發揮し、また二人の生徒を学校に連れてきて一緒に讚美歌を歌う、というように伝道の深まりとともに讚美歌も浸透していったのである。

## 彦根伝道

一八七八年の十月四日のスタークウエザーの書簡に本間重慶の彦根伝道の話題が出てくる。<sup>(90)</sup>十九日の書簡では、本間重慶がドーンから習った音楽教育の改良に熱心で、彦根に赴いてから毎日午後には音楽を教えていることが書かれている。<sup>(91)</sup>

彦根伝道の開始は、日本ミッシヨンの伝道史の初期にさかのぼる。彦根に最初に足跡を残したのは、O・H・ギューリック夫妻で、一八七二年の七月であった。翌年五月にグリーン夫妻が彦根に入り、彦根出身で一八六八年年に横浜でバラから洗礼を受けた鈴木貫一に接触した。<sup>(92)</sup>

こうして早くから着手されていた彦根伝道であったが、重慶が彦根に赴いて音楽を教えていた頃には、教会を組織することが問題になっていた。それに積極的に関与したのが本間重慶と彼の婚約者、春であった。春についてスタークウエザーは、「教会用讚美歌のほとんどすべてをとても上手に演奏する」と書いている。<sup>(93)</sup>一二月には、春がさらに進歩したことについて、「彼女は上手にオルガンを演奏するので礼拝でとても役に立っています。到るところで彼女の良い影響がみられます」と述べている。<sup>(94)</sup>春が身につけたこのあたらし技能が、彦根教会の設立にどれだけ役だったかは、教会を設立しようとした際、彦根の信者がまず行ったことは、オルガンを買い求めることであつたことから判断できる。このことについてスタークウエザーはこう語っている。<sup>(95)</sup>

「一人の男がオルガンをたいそう欲しがっている。おそらく彼はオルガンをまだ見たことがないでしょう。彼は四十ドルで家宝や着物を売りました。それで、遠からず形成される教会のために楽器を買うことができるか彼は相談している。彼は彼の妻と娘に演奏を習わせたがっている」

この一人の男とは、中島宗達のこと、彼は、娘の茂千代を同志社女学校に送ることになった。<sup>(96)</sup>

十二月に彦根を訪問したミス・ジュリア・ギューリックは、彦根の「熱心な人々が四人の少女を京都ホームに送った。彼らはまたカルフォルニアにエステのオルガンを九十ドルで注文した。本間氏によれば、彼らは首を長くして待っているというのである」と述べている。<sup>(97)</sup>

彦根の人々は最初、手風琴、つまりアコーディオンで讚美歌を練習していたが、やがてどうしてもオルガンを入手しなくなった。オルガン購入経緯について『彦根基督教会略史』は次のように伝えている。<sup>(98)</sup>

「さて次は讚美歌の合唱にはなくてはならぬオルガンであるが、この彦根にも最初のオルガンが購入されたのである。古色蒼然たるかのオルガンの裏板をはづして見れば、其処には明治十二年に有志の寄附によつて購入した旨を書きつけ牧師本間重慶、世話方三谷岩吉と記されてある。寄贈者と言ふのは彼等明十社の人々である事は勿論であつて、彼等は讚美歌の練習を西洋人の手風琴でしてゐたが不満足だったので、如何にもしてオルガンを備へたいと思つた。然し当時の金額にして百円位もするとの事であつたから到底小使錢を出し合つた位では買へぬ事を知つたが、なんとかして買ひ入れたいものと衆議を凝らして遂にオルガン講を作るに至つた。当時神戸よりジュリヤ・ギユリツキと言ふ婦人宣教師が専ら婦人の間に伝道せんと屢々彦根に來り、其都度中島家或は片原町の鈴木實一氏宅にて常に懇切なる待遇を受けて滞在してゐた、この人がオルガンの購入について非常に賛成し自ら進んで寄附をなし、或は友人を説いて寄附金を集める等努力せられ、その注文交渉はその実兄オ・エツチ・ギユリツキ宣教師が之に當つた。其の講は明十講と呼ばれ一口五十錢二十ヶ月満了とした。第一回の掛金は全部寄贈と決定し、遂に六十円の金額が出来上つた。しかし未だ四十円の不足である。色々交渉の結果不足額をばこの美学に感じた米國商人が進んで値引して、その上運賃の全部を負担したのであつた」

## 彦根教会のオルガンと中島茂千代

一八七九年一月、中島茂千代は、オルガンを習わせたいという父の希望によって彦根から同志社女子に送られた<sup>(99)</sup>。三月二十四日付の書簡によれば、デイヴィスは新島と共に正午に大津より汽船で彦根に向かった。彦根についた彼らは、本間が教会の組織に向けて熱心に活動しているのを見た。彼らが特に驚いたのは、本間の指導によって彦根の人々が上手に讚美歌を歌っている光景であった。特に本間が作詞し、「work for the night is coming」の旋律に合わせて歌う光景には感激したと、デイヴィスは書いている<sup>(100)</sup>。略史では、「其の頃の讚美歌は二、三しかなかった。『道に従ふものはよろこべよエスは限りなき救主、エスよく守りて我を助けん』」「エス我を愛す、さうよ聖書にぞしめす」等それは少ないだけ珍しがられ、人気を呼び、酒屋の丁稚小僧までもが町々を唱ひ歩いた<sup>(101)</sup>と述べられている。彦根教会の設立式が行われたのは六月四日であった<sup>(102)</sup>。オルガンがこの年の十二月に到着した。到着してからの様子を、略史は次のように伝えている<sup>(103)</sup>。

「一同の喜びは例へやうもなかつた。之が即ち彦根最初呑滋賀県に於ける最初のオルガンであつたに違ひない。而も日曜以外の日はオルガンが宅廻りをしたのであつた。「私の宅などへは、人夫で担いで来たり、車で運んで来て、わざわざ中島重千代さんが教へに来てくれました。」(速水翁談) 之は少し後の事であるが、淡海女学校(現彦根高女)が明治十九年に開かれた其開校式に教会のオルガンを貸したが、しかし之を鳴らす人がなかつた。恰もその時中島重千代さんが同志社を経て東京音楽学校を卒業して居られたので是非にと懇望された。所が町の与論が沸騰した、ヤソが女学校に入つたと。其の後各学校にも之を備付けたのでオルガンとヤソとは別ものである事が解つた。この名誉あるオルガンは今中島家の応接室にその静かな余生を送つてゐる」

中島茂千代は、一八八六年六月に英語科を卒業した。音楽取調掛が東京音楽学校になるのは一八八七年十月のこと

であったが、その直前の七月五日に「明宮殿下（後の大正天皇）および内外の貴賓約五百名を迎えて演奏会を開催」した<sup>(10)</sup>。そのプログラムに「三 洋琴 好伴侶曲 二人連弾 エフ、バイイル作 中島茂千代 大久保鈴子」と、茂千代の名前を見ることができ<sup>(11)</sup>。音楽取調掛、その後身の東京音楽学校は、ミッションに人材を得ることがなければ組織を維持できなかったと思われるが、中島茂千代の場合もこの文脈の中で捉えることができる。

ところで、一九九六年十一月一日同志社女子史料室で「キリスト教女子教育とオルガン」と銘打った音楽会が催された。その折りに、坂本清音氏の調査で「中島家の応接室にその静かな余生を送つて」いたオルガンが京都に現存することが分かり、通常であれば史料から想像するしかないオルガンの音を音楽会で実際に聞いた時には、感銘を覚えた。製造番号八三六一八のエステ社のオルガンの裏板には、略史が伝えるようにこう記されてあった。

「一 風琴 考具

右ハ篤志者ノ集金ト教会ノ貯金トヲ併セ之ヲ買求シ彦根基督教々会ニ寄附ス

世話方

三谷岩吉

明治拾貳年

拾貳月

全

本間重慶

## スタークウエザーの生徒と讚美歌

本間重慶はスタークウエザーが讚美歌を弾いては涙していたと書いていたが、彼女の生徒たちがどんどん讚美歌を覚え親しんでいった一八七九年が、おそらく彼女の宣教生活の中で最も幸福な時期ではなかったろうか。この年、彼女の書簡には、少女たちが歌う讚美歌の話題がしきりに出てくる。

二月一日の書簡では、

「わたしが決心した一つことは、できるだけたくさんの人がわたしたちの最良の聖歌に親しむようになることです。家中いたるところで、彼らの仕事中、あるいは祈っているとき、楽しい歌声を聞くと、わたしの心はよくなります。日本人は歌が歌えないと言う人は時々ここに来ることができればと思います。各週の礼拝集会には熱心に参加してきます。ここから楽しんでいきます。彼らは歌手は忘れても、歌を忘れることはないでしょう」と決意を表明している。<sup>(11)</sup>この頃、まだ支配的だった常識、宣教活動の比較的早い時期に出来上がった常識が宣教師の間にあった。それは、日本人は西洋の歌が歌えない、という常識であった。当時、宣教師らには日本の音楽を音楽として認める視点がなかったのです。彼らが抱いていた常識の意味するところは、日本人には歌唱能力の点で欠陥があるということであった。スタークウエザーは自分の体験にもとづいて、自信をもってこの常識を覆したのであった。

同月二四日の書簡では、以前、本部のクラークとの間にトラブルを起こしたオルガンについて、「カルフォルニアのリチャード夫人が送ってくれたオルガンが歌唱にとても役に立っている。彼女たちの声が、たくさんの（常に増え続けていますが）わたしたちの最も古い歌、そしてゴスペル・ソングで声の一つになるのを聞くことは、わたしと同様、あなたにも喜ばしいことだと思います」と述べている。<sup>(12)</sup>続けて、「お茶の後、若い少女たちは自発的な祈禱集会を催します。祈りの静寂の後に彼女らの楽しげな声となって流れ出します」とうれしそうに語っている。<sup>(13)</sup>

また、女学校の外での伝道活動の折にも日本の子供たちに楽しそうに讃美歌を教えている様子が、五月二二日の書簡に次のように書かれている。<sup>(109)</sup>

「ラーネッド夫人とわたしは教会を訪ねてみました。時間が割ける時は、わたしは子どもたちと歌い、話しをします。ここから近い説教所にオルガンを持参します。たくさん群がってきて、楽しいことに、いろんな絵を見たり遊んだりしていた明るい子供たちは、讃美歌集を欲しがります。そして、Jesus loves me と A Happy Land の稽古になります」

### ゴードンの歌唱授業

彦根教会にオルガンが届くより数カ月前の京都では、九月一日、ゴードンが音楽掛図、おそらくドーンが入手したメーソンのものを引き続き用いて唱歌教育をしている様子を京都府学務課の役人が視察した。<sup>(110)</sup> アメリカでメーソンに会い、ミッションの音楽教育と文部省の音楽教育とを連携させるように要請したゴードンは、一八七八年十月一日、日本に向けてサンフランシスコを発った。<sup>(111)</sup> 再来日後の最初の手紙は京都発になっているが、ドーンが去った後の同志社の音楽教育を引き継いだのがゴードンであった。ゴードンの音楽授業を視察した府学務課の役人は次のように記録した。

「マター教場ニ至ル。ゴルドン唱歌ヲ授ク。生徒各シングスオフロブノ一冊ヲ手ニス。既ニシテゴルドン、123 (ワンツウスリー) ヨリ78ニ至ル迄ノ数字ヲ以図ヲ作り、音声ノ高低ヲ教ルノ掛図ヲ掲ケ、竹竿ヲ把テ其字ヲ指シ、音節ヲ授ル二十分時ハカリ、而シテ後、嚮キノ書冊ヲ開カシメ、其歌ヲ123ノ譜ニ応シテ歌ハシム。是ヲ本日ノ課業ノ畢トス」(句読点筆写、以下同様)

この時音楽の授業を受けていたのは四人の五級生を含む七名で、彼らが使っていた讚美歌集について同記録は次のように記している。

「シングオフ（ロープハ）（虫食）即チ愛之歌ト訳ス。其章句皆聖經ノ中ヨリ抄出シタル者ト見ヘテ悉ク神徳ヲ述ヘ神恵ヲ謝スルノ歌ナリ」

女学校については次のように視察している。

「一室ニハ洋琴ヲ据ヘテ一生徒ニ習ハシメタリ。既ニシテ又一ノ警夫アリ来リ歌ヲ唱ヘテ之唱ラス」

讚美歌を教えていた目の見えない男性について、スタークウエザーが「此ハ横浜ニ在リテ数年来此技ニ熟シタル人ナリ。日々来リテ生徒ニ授業スト」と説明したと記録にある。

また十月の視察記では、スタークウエザーが二人の女生徒にオルガンの模範演奏をさせ、自分も弾き、歌ったと、次のように記録した。<sup>(11)</sup>

「マター室ニ至レハ、一女子ノ洋琴ニ倚リ音ヲ調ブルアリ。女教師スタークウエツソル曰ク。此女子大ニ此技ニ進メリト。亦稍々長シタル一女子ヲ招キ来リ音ヲ調ヘシム。後チ教師自ら調ヘ且歌フ。其歌ハ故郷ヲ慕フノ歌ナリ」

十七日の手紙で、ゴードンは、最近、京都府の学務課から二人の役人の視察を受けた。親切にもてなしたので、彼らは機嫌よく帰ったと書いている。<sup>(12)</sup>

京都府学務課では、すでに述べたように十月二十二日、京都女学校編「唱歌」一篇を出版した。それは在来の地唄の曲をそのまま使い、歌詞を教育的に改良し、筑紫箏を使った唱歌教育のための教科書であった。同志社のゴードンの音楽授業と比較して学務課の役人はどのような印象を持ったのであろうか。

翌、一八八〇年二月の視察記は、ゴードンの授業について、「正課時間ハ午後三時ヲ以テ了リ、一同退散ノ時、教

師ゴルドン来リ曰ク。是ヨリ半時間有志ノ生徒へ唱歌（蓋シ正課外ノ科ナリ）ヲ授ケントスト。因テ其教場ニ到リ視ルニ、前回述ル所ト異ナルモノナン。是ヲ当日視察ノ畢リトス」と記している。<sup>(11)</sup>

三月、メーソンが文部省の音楽取調掛に着任し、同志社英学校と女学校と同様な教育を開始したのである。さらに十月の記録で新島八重がオルガンを弾いている様子を次のように記録している。<sup>(12)</sup>

「返リテ休憩所ニ至ル。聖語ノ短冊ヲ掲ケタル壁間ニ向ヒ洋琴ヲ弾ス。新嶋襄ノ妻ナリ」

この年の九月から翌年の六月までは、同志社女学校では、歌唱とオルガンの授業が毎日おこなわれていた。<sup>(13)</sup> 毎日十二時から十分間、歌唱の授業があり、課外でオルガンの授業がおこなわれた。<sup>(14)</sup> 一八八一年六月二一日の学務課の視察は、この唱歌授業を次のように記録した。<sup>(15)</sup>

「午後一時二十分前十余名ノ生徒休憩時間運動ニ換ルニ一ノ生徒楽器ヲ弄ス衆生徒楽譜ヲ朗吟シテ相和ス」

### 三 神戸ステーションの音楽教育

後、音楽専用の建物を建てるなどして、日本ミッションの音楽教育のセンターとなつてゆく神戸女学院の音楽教育の初期のエピソードとして『創立五十年神戸女学院史』は次のような話しを伝えている。<sup>(16)</sup> タルカットは「一生徒が音楽の才能を持つてゐるのを認め是非オルガンを稽古させたいと思つて、その家庭を再三訪問し、別に校外の教師に就かせたりした事もあつた」。神戸英和女学校では、音楽の才能のある生徒を学校外の宣教師にならわせにやつたりしていたようである。

一八七八年二月に京都ステーションでは、最初のオルガンに続く二台のオルガンが本部から到着していた。次々に

要求されるオルガンの対応に追われていたクラークは、すでに一台所有しているにも関わらず、神戸女学校のタルカットがさらに一台要求していることを知らされ驚きを隠さなかつた。<sup>(11)</sup>

「あなたの学校にオルガンを一台送れという請求があつたということについて数日前、ヒューチンス氏が私に注意をうながした。すでに一台あるのに、さらに請求するとは驚きました。でも、すぐに友人のスミス氏に話しました。彼は私が要求すれば気前良く楽器を提供してくれます。彼に機会がありしだい一流の楽器をあなたに送るように頼みました。私が思うに神戸でも対策が必要な、あのじめじめと湿気の多い気候に絶えうる素材で楽器を組み立てるのに彼は苦勞すると思います。あなたがすぐに楽器が入手できないことをお詫びします」

オルガンの需要への対応に追われているクラークのこの姿と、スタークウエザーが、日本人がどれほどオルガンに惹かれるか母国の人たちには想像がつかない、と言っていることなどを考えあわせると、オルガンは、最初からミッション活動にとって必需品という認識はなかつたことが分かる。それもあつて、女性宣教師は、オルガンの要求は、直接本部のクラークに申請するのではなく、ウーマンズ・ボードの関係者に申請している。タルカットの場合も直接クラークではなく、ヒューチンス氏に要請した。ヒューチンス氏から事情を知らされて、自分の職域が犯されたように感じたであろうクラークは、あらたに起こつたオルガン需要を自分の職掌下に収めるのに苦慮するのである。その際、スミス・アメリカン社の厚意によって、日本のオルガン需要に何とか対応することができ、かつてその社のカタログに推薦文を寄せたことが以外な効果を持つたことにクラークは胸をなでおろしたことであろう。オルガンに熱中する日本人はミッションにとつては予想外のことであつたのである。このことは、西洋音楽の受容は、宣教師に与えられるままに受け入れただけでなく、日本人の側からも積極的に関与した結果でもあつたことを教えてくれる点で重要である。

神戸ステーションでは、タルカットが、三月二十九日、アメリカン・ボードの財務担当のワード宛に、オルガンに  
関する返事を書いた。<sup>(111)</sup>

「オルガンに関する情報、および、わたくし共の学校に一台の楽器を—との希望に対するご返事に御礼申し上げます。  
スミスのオルガンは最も廉価でございますので、わたくしの友人のコードヴァ氏が、そこから五十一ドルで売りに出さ  
れております楽器を発注するよう望んでおります。当伝道団宛に送られて参りましたオルガンは、いく台か、梱包が  
しっかりしておりませんでしたために、ひどく傷んでおりました。どうぞ、スミス氏にこのことをお知らせ下さいま  
して、予め特別の配慮がなされますよう御依頼下さいませ。費用の点でブリキの内張り無しでお送りいただきとう存  
じます。楽器が本場に満足のゆくものでありますよう切望しております」(若山晴子他訳)

二ヶ月と少し後になると、今度はクラークソンがアメリカのブルックリンのトロウブリッジ夫人にオルガンの必要  
性を訴えた。<sup>(112)</sup>

「この前、テイラー氏が私のオルガンのことでメイスン氏にお会い下さいましたが、私は今まで、オルガンが必要か  
どうか決めかねておりました。けれども必要になるであろうことに気がつきました。私共は三二九型について話し  
ました。「……………」価格八六ドル五八セントで、楽器の質が同じであれば、木部ができるだけ濃い茶色のものを希望  
いたします。また、黒いバス織のものになるかと思いますが、スツールをひとつ、それから初心者用のオルガン教則  
本を御発注いただきたく存じます。どの著者のものがよいかということについて相談のつて下さる方を、多分見つ  
けることがおできになるかと存じます。オルガンは船で送られてくるわけですから、ブリキで梱包し、また保険を  
かけておいていただきたく存じます。お手を煩わせて恐縮でございますが、私はできるだけ早急にオルガンを手い  
たしたく存じます。本便がブルックラインに着く頃には、ポール女史は御不在と承わっております」(佐伯陸他訳)

女学校では、オルガン教則本を使った指導をはじめろうとしていたようである。大阪のゴールドイヤ京都のスタークウエザー、そして同僚のタルカットの時とおなじように、オルガンの入手の必要を感じたとき、クラークソンは直接本部ではなく、おそらく女性宣教師の団体の関係者のトロウブリッジ夫人に送ってくれるよう要請している。予定外の高価な楽器を本部に要請することがためらわれたのであろうか。

一八八一年までにはオルガンを備え、それを教えるようになったことが、この年の一月十八日のクラークソン書簡から分かる。<sup>(11)</sup>

「先頃、二人の母親が娘の入学についてたずねに見えました。(中略)ここでは生徒たちに「三味線」を教えているかとの問いに教えまさんと答えますと失望されたようでしたが、生徒たちが十分に進歩したのちに本人が望めばオルガンを習うことができると申しますと氣をとりなおされたようでした」(吉年ユウ子他訳)

しかし、この頃にはオルガン二台では足りず、クラークソンは三台目を自分の負担で分割払いで購入する予定であった。<sup>(12)</sup>

「すでにアーノルド夫人に連絡いたしました。もし遅すぎないようであれば、分割払いでオルガンを購入するのをやめることにしました。これは先生の御承認を頂きました上で夫人が買って下さることになっていたものですが、私は、発注しました折には、まだ自分の収支計算を把握しておりませんでした。「もっとも」学校のためには是非一台必要でございます。ここにありますものは、全く、あるいは少なくともほとんど、役に立ちません」(吉年ユウ子他訳)

二月八日にクラークソンは、生徒のオルガンの練習に台数が足りず、もう一台必要とクラークに次のように訴えた。<sup>(13)</sup>  
「オルガンが購入されていなかったことをとても喜んでおります。しばらくの間延期せねばならないでしょう。一台

は是非必要でございます。学校にあります一台は美技の時間でいつも使用されておりますので、数名の生徒は練習したくてもできないのです。私は、伝道会が学校用に一台備えつけてくださることを当てにしているのですが、いまません。個人的に一台求め、寄宿生に使わせるつもりでございました。これまでに二台所有いたしました。いつもかなり頻繁に使用しております。また、現在学校にあります一台は使用不可能な状態にあることが多く、教会で演奏をしております生徒たちが練習できませんので、特に困っております」(吉年ユウ子他記)

八月十七日に札幌滞在のクラークソンはオルガン到着の礼状を認めた。<sup>(註)</sup>

「オルガン到着の報を得ました。特に御礼申し上げます。生徒たちは大喜びで、私宛の手紙に書いてまいりました」(吉年ユウ子他記)

翌一八八二年一月、クラークソンは日本を去った。八五年に再来日し、翌八六年一月より今度は同志社女学校で働くことになり、ここでも彼女は音楽教育の整備に貢献することになる。<sup>(註)</sup>神戸女学校では、より充実した音楽教育を整備するための努力がクラークソンが去った後も続けられることになるが、その前に、もう一つのステーション、大阪ステーションの音楽教育を見なければならぬ。

一八八〇年三月二日、文部省お雇い音楽教師メーンソンが横浜に到着した。二十六日に大阪ステーションで働いていたコルビーは、さっそくメーンソンについてクラークのように注意を喚起した。<sup>(註)</sup>

「カーチス夫人が音楽を教えています。政府はこれを教えるために一人のアメリカー人紳士を雇いました。音楽は重要な要素になりました。(中略)唱歌を教えるためにやってきたメーンソンがクリスチャンかどうか知っていらっしやいますか。政府が雇う外国人が本当のクリスチャンであるように、私たちのために祈って下さい。このことはこの国にとって宣教師を派遣するよりもっと重要なことだと私は思います。私たち宣教師のために祈って下さるとき、この



- (4) N. G. Clark's letter to Doane, 1875. 1. 7 (Reel 26, 273). Reel は同志社大学学術情報センター所蔵のアメリカン・ホーム宣教師文書「インタロニー」の「ルー」番号」の「後の番号」の書簡番号。ズレ同様。「I will instruct my clerk to look the charts to which you refer and we may send them on by mail or with Mr. Leavitt.」が「」の書簡は本井康博氏と誤訳しているのだが。
- (5) N. G. Clark's letter, *ibid.*, "I note your remark in regard to music. Mr. Green has said something on the subject. As your attention is turned to this matter, I hope you will be able to arrange some tunes suited to the wants of the Japanese mind. I have great confidence in the power of music over many minds in preparing them to receive the truth. With the heart man believeth unto righteousness and through the emotions awakened in the proper manner we may hope to reach the heart savingly with Gospel truth."
- (6) J. D. Davis' letter to N. G. Clark, 1876. 1. 12 (Roll 2, 235). Roll は同志社大学人文科学研究所所蔵のアメリカン・ホーム宣教師文書「インタロニー」の「ルー」番号」の「後の番号」の書簡番号。「Mr. Doane has permission to reside here until the opening of the Exhibition Mar. 15th and as that last 100 days this fixes him here till July. He is teaching an hour and a half a day in the school and studying the language.」インタロニー書簡に同じだが、同志社中高等学校年報「薨」第十二号（一九八一年）から第二十五号（一九九四年）に連載された森永長郎氏の「J・D・デイヴィスの手紙（一）～（一四）」を参考とした。
- (7) 本井康博「京都博覧会とアメリカン・ボード」（『キリスト教社会問題研究』第四五号、一九九六年）一〇〇—一二九頁を参照。
- (8) 坂本清音「同志社女学校初代婦人宣教師 Alice J. Starkweather」（『同志社女子大学総合文化研究所紀要』第二二巻、一九九五年）二二頁および注(6)の「インタロニー」書簡を参照。「His wife professed her faith in Christ and received baptism the day before in presence of a large company of Japanese」
- (9) 同右、一一頁参照。坂本清音「明治初期キリスト教主義女学校の草創—J. D. Davis と同志社女学校—」（『同志社女子大学総合文化研究所紀要』第八巻、一九九一年）二五頁参照。「Alice Jennette Starkweather.」In *Vinton Book* Vol. 1, 93. "Mission Roll." *Mission News* (1911):201. 参照。
- (10) 坂本清音「同志社女学校初代婦人宣教師 Alice J. Starkweather」（『同志社女子大学総合文化研究所紀要』第二二巻、一九

- 九五(年)一二—一三頁。本井康博『京都のキリスト教』(日本基督教団同志社教会、一九九八年)八四頁。
- (11) 本井康博、右掲書、八四頁。
- (12) 本井康博「京都プロテスタント史年表」(『京都のキリスト教』京都：日本基督教団同志社教会、一九九八年)三三八頁。
- (13) 坂本清音「草創期(一八七六年—一九〇〇年)同志社女学校の音楽教育」(『同志社談叢』第一八号、一九九八年)六七—九四頁。
- (14) Minutes of Special Meeting of Mission 1875 (Reel 327, Vol. 1, 25). 吉田亮「資料紹介：アメリカン・ホーム・議事録」年會報告(二)——一八七五—一八八〇年(同志社大学人文科学研究所第二研究(A)班研究発表資料、一九九三年七月二三頁)。
- (15) J. D. Davis' letter to N. G. Clark, 1876. 3. 14 (Roll 2, 241). "In regard to the plain organ asked for for Kiyoito I need say nothing only that we do not want one with nine stops. They get out of order too easily."
- (16) 本井康博「右掲書」五二頁。O. H. Gulick's letter to N. G. Clark, 1876. 3. 20 (Roll 4, 434). "The organs are found to be a most valuable aid in drawing audiences where as yet a deeper interest has not entered the hearts of the people." 原書簡の複写は本井康博氏が入手になった。
- (17) 本井康博「右掲書」六九頁。J. D. Davis' letter to N. G. Clark, 1876. 3. 3 (Roll 2, 245). "Mr. Doane is a Godsend to the school. He is doing now 2. 5 hours a day of the most efficient service in it. Half an hour of it is in teaching music the very first attempt of the kind in Japan and it is a success." この書簡はやはり森永長書院「J・D・戴维斯の手紙(7)」(『薔』第一八号、一九八七年)七〇頁で紹介されているが、手紙の日付の確認等については本井康博氏のご教示を賜った。
- (18) E. T. Doane's letter to N. G. Clark, 1876. 3. 18. "Let we thank you for sending the Musical Charts—I am a little surprised at their price \$15—since I think Mrs. Doane purchased Mr. W. Mason's charts per \$5."
- (19) Report of Kiyoto Sation from June '75 to May '76 (Reel 327, Vol. 1, 26). "Rev. E. T. Doane arrived in Kioto in Dec. last and at once began teaching in the school taking a class, who could read English through the old Test. Hist. as contained on "Live upon Live" and "Precept upon Precept," & also succeeding in what we believe is almost the first attempt at teaching the art of vocal music in Japan, so that the walls of the building, which a few months

- ago contained the Governor of the city now resound every day with Christian hymns.”
- (20) 同志社女子養育院編『慶親期の同志社』(同志社女子養育院 一九八六年)九七頁。
- (21) “Smith Organ for Kiyoto. The Committee authorized the sending for an organ made by the Messrs. Smith (and given by them to the Board as a donation) to Kiyoto.” Minutes of Prudential Committee, 1876. 5. 2 (Prudential Committee. Minutes (ABCFM) 1810-1966. Microfilm. Reel 5).
- (22) N. G. Clark's letter to J. D. Davis, 1876. 3. 3 (Reel 27, vol. 71). “The organ is packed, and will soon be on the way. I send you one of Smith's instead of Mason & Hamlin for the simple reason that Mr. Smith gives us organ at half price and then sends us bills receipted for that to the amount of \$500. He makes his contributions to the Board in this way.”
- (23) Starkweather, Alice J. “The Opening Work in Kioto. A Letter written by Miss Starkweather to the ladies of Canton, Ill. Kioto, May 10 1876.” *Life and Light for Woman* Vol. VI, No. 10 (1876):309-310. “for as yet preaching is allowed only in the houses of the missionaries. (廿番) Rev. Mr. Doane also has preaching every Sabbath morning, and Japanese prayer-meeting in the evening, at his house in another section of the city. Mr. Neesima, the Joseph of his people, has service in the afternoon. You do not know how delightful it seemed last Sabbath to hear them singing in Japanese, “To-day the Saviour calls.” Quite a number of the dear familiar hymns have already been translated, and others, composed in Japanese, set to the precious home tunes. “Jesus loves me” is all special favorite and I am happy in being able to assist in leading the hymns to which they are so unused. The choicest hymn in the collection was written by Tok San, a member of the Samurrai class, now reduced in fortune, and a servant in Rev. Mr. Davis's family.” 坂本清音「同志社女学校初代婦人宣教師 Alice J. Starkweather」(『同志社女子大学総合文化研究紀要』第一二巻 一九九五年)一一二頁。スタークウエザーの書簡について、以下の坂本清音氏の研究を参考にした。
- 坂本清音「米国伝道会宣教師文書—A. J. Starkweather 書簡—」(『同志社女子大学総合文化研究紀要』第七巻 一九九〇年)。坂本清音「米国伝道会宣教師文書—A. J. Starkweather 書簡(一)—」(『同志社女子大学総合文化研究紀要』第八巻 一九九一年)。坂本清音「米国伝道会宣教師文書—A. J. Starkweather 書簡(二)—」(『同志社女子大学総合文化研究紀要』第九巻 一九九二年)。坂本清音「米国伝道会宣教師文書—A. J. Starkweather 書簡(三)—」(『同志社女子大学総合文化研究紀要』第九巻 一九九二年)。坂本清音「米国伝道会宣教師文書—A. J. Starkweather 書簡(四)—」(『同志社女子大

『基督教文化研究所紀要』第一〇卷（一九九三年）。

(24) 本井康博「右掲書」六二一—六八頁。

(25) Starkweather, Alice J. "Japan. On the Mountain, Miss Starkweather. Mount Hieigan, Near Kioto, Sep. 14, 1876." *Life and Light for Woman* Vol. VII, No. 2 (1877):53-55. "Sabbath afternoons, after the Japanese service conducted by our teachers, we meet to sing and pray in English; and the grounds resound with a strange melody, I assure you, as we sing from the "Gospel Songs" newly arrived, or the "old, old" songs that we have loved so long."

(26) "We began regular school exercises Oct. 24, just five days after the anniversary of the first entrance of Kioto by Mr. Davis with permission to live in that city. We had four boarders and eight day scholars, making our full number twelve." A. J. Starkweather's letter to Miss Follock, 1876. 11. 5 (Roll 5, 240).

(27) Starkweather's letter, *ibid.*, "Oh, if you could hear their voices as they learn to sing and pray and enter upon their regular studies, fitting them for the great future that awaits the girls and women of Japan, you could appreciate our joy and feel we were already receiving a rich reward for all the care bestowed."

(28) N. G. Clark's letter to Rev. D. W. Learned, 1876. 12. 2 (Reel 28, Vol. 73). "I am the more anxious that Miss Starkweather's school should be commenced, and should be known as a fact accomplished in order to prevent other societies if possible from coming into Kioto. I have heard within a few days that several other societies are contemplating going in there. I very much regret this." 坂本清雄「同人社女学校初七婦人宣教師 Alice J. Starkweather」『同人社女大卒總合文化研究所紀要』第一三卷（一九九五年）一三頁。

(29) J. D. Davis' letter to N. G. Clark, 1877. 1. 15 (Roll 2, 260). "We observed the week of prayer by a general prayer meeting here in Kiyoto and I never attended such prayer meetings before in my life. From 80 to 100 were present. There was no talking, no reading of scriptures, nothing but prayer and singing and the only way we could give out a hymn was to give it out on our knees in the middle of an amen. Two three and even four voices would begin to pray in unison at the close of each prayer and it seemed to be simply a question of "the survival of the fittest" all the week."

(30) N. G. Clark, 's letter to O. H. Gulick, 1877. 3. 1 (Reel 28, vol. 73, 627). "One word more in regard to special appeal.

I was informed by the Woman's board here that Miss Starkweather had applied to the Ladies in Hartford for an organ. They, as in duty bound, referred the matter to the Woman's Board, and the Woman's Board not being allowed to vote moneys without our endorsement, sent the request to me. This was ten days ago. I put the request among my papers to be brought before the Prud. Com. on the Tuesday following with a view to ordering an organ at once to be sent out. A few hours later, took up the "Pacific," published at San Francisco, and chanced to fall upon a notice that the lady in San Francisco had furnished the money for an organ and that it was to be shipped by the next steamer. This glance at the newspaper saved me from sending a duplicate organ, and therefore saved a waste of funds. This is but one illustration of what may happen, and has happened again and again. Let all special request be addressed to me whether from men or women. This Board intends to supply whatever is really necessary." 長編ハトローニョニド調養したキミガミドシツビチ本井護博'右掲書'五二一―五四頁'六八一―六九頁'八二頁ヲ録載せしむ。

(43) J. D. Davis' letter to N. G. Clark, 1877. 3. 8 (Roll 2, 266). "The organ asked for a year ago for the Kiyoto Station has just come. A "Smith American." It comes in perfect order and is a thing of beauty and a joy forever. Please thank Mr. Smith through whose liberality we are enabled to secure these organs.

May I not also trouble you to speak to him or send to him this letter that we may know what it would cost us to secure the plainest cheapest 4 or 4.5 octave organ for use in our training school and also, being light and portable, that could be carried around for our outstation work.

Mr. Doane is doing a great work, for the service of song in this Empire by teaching music to the 10 young men in our Training school here but he needs such an organ to help him in this work and to be used also at our morning prayers in school.

We have none of Mr. Smith's catalogues and we want to know what such an organ would cost us if we should try to buy it, and if, on reading this letter and knowing our need and the great help it would be to us, either Mr. Smith or the Board or both together are ready to send us on such a plain organ for the chapel of the Training school without waiting to hear from us again, we shall have it four months sooner and will thank you; but if not



is a \$250 one which is given us at ninety dollars with ten dollars expense for tinning. This puts that therefore, at \$100 jut double the smaller instrument. The larger instrument I have charged in account to the Japan mission for the use of your schools at Kioto in accordance with Mr. Davis representations. Please confer with Mr. Davis on the subject, and take which ever of the two instruments you may choose an balance the account accordingly with Mr. Jencks. I will not write therefore to Mr. Davis farther on the subject, but leave it for you. I trust this arrangement will be satisfactory. The large reductions are due to my good friend here and neighbor, one of the leading members of the organ firm."

- (32) Starkweather's letter to Miss Child, 1877. 5. 19 (Roll 32, 74). "These people were but a few doors from Prof. Learned's where is regular preaching. They are always very kind to us but I think have never attended any service. In the face of these great festivals we are for a moment tempted to be discouraged, but at the next corner we meet a group of young converts with their faces all aglow with a Christian hope, seeing in these processions only children's play and ready in the evening as we gather for prayer to tell the "old old story" and point to the one true God! The eager listeners who gather about the door, attracted by the organ and one by one drop inside, to hear more. "That organ!" I know you dear people in Boston will forgive me for seeming to have been so naughty all unintentionally, when you know how much good it has already done, (but you cannot know) or if you could only hear the full chorus of melody, it awakens in two widely separate parts of the city, in place of the discordant "growl", before it came." 前の年の十二月十六日のローネンズ書館に「金曜日の夕方には祈禱会がなされ、」  
 へ眼をめぐり、スタークウエザーが来りてくる集會はローネンズ館の第一公会のひ、オルガンは、ローネンズの第一公  
 衆に敬禮をなされ、それの聲に應じられ、それのひ、あひひ。

- (33) Starkweather's letter, ibid. "I was no less surprised than sorry to find I had been acting "out of order" in asking the dear friends in Hartford for an organ, knowing the pleasure it would give them, and really supposed it would be grateful to the Board to receive such a contribution. We expect to wait nearly a year before receiving an instrument at the very earliest but the promise "Before they call, I will answer" is being so richly fulfilled to us here we must arrange our plans accordingly in future.



- a joy and blessing to us all, it seems a strange providence that removes them both in such abounding physical health. But dear sisters mind is in such a condition.”
- (44) N. G. Clark's letter to Davis, 1877. 5. 2 (Reel 28, Vol. 74, 365). “It is painful to us to think of recalling Mr. Doane from the field of labor where he has shown himself so eminently useful for beyond our expectations. His earnest Christian spirit and practical good sense joined to his instructions in English and music can hardly be made good by any other man.”
- (45) J. D. Davis' letter to N. G. Clark, 1877. 3. 26 (Roll 2, 267). “I want to say one more word, that in view of the work that Mr. Doane is doing in English with the present very remarkable class of young men in the Training school and the great work he is doing in music there also as well as in view of the value of his advice and above all in view of the example of his noble Christian spirit, I do not think there is a man in the Mission who cannot be as well spared as he, and I think our whole Mission would be unanimous in that opinion.”
- (46) J. D. Davis' letter to N. G. Clark, 1877. 6. 11 (Roll 2, 274). “Mr. & Mrs. Doane went away. They sailed from Yokohama May 14th (24th?). I want to say again that if any circumstances should arise, so that Mr. Doane could come back to Japan within the next few years that his work will be waiting for him here. His music teaching alone would pay for his coming.”
- (47) 同前社中致録本強鑑、廿四號、四三頁。
- (48) “I then expressed to him the opinion that his work could not reach accomplish high and wide-spread results unless he was able to cooperate with the missionaries. With the wide-spread and ever wider spreading work of our mission.”  
安田寛「L・W・マンソンの再来日記」四ノハノムツカ、キーン田本「ミン」(『キリスト教社会問題研究』第四四卷、一九九五年)一四一―一五頁、三三五―三六參照。
- (49) Colby, Abbie M. “Music and Mission.” *Musical Herald* 5 (6 1884):384. “When Prof. Mason visited us three or four years ago, I promised him that I would write you of his visit to Osaka; and, if my life were not so intensely busy, my neglect to do so without excuse. His visit at that time was a great enjoyment and stimulus to the missionaries and many Japanese, and we look forward with hope to receiving his help in the future.” 廿六本巻一四

の』指示。

- (50) 「メーンン冬期休業中旅行伺」(『回議書類 明治一三年二月一五年六月 下巻一五九以下』)
- (51) ハメリー (Parnalee, Harriet Frances) 「日本の音楽研究者に向つ」(『月刊楽譜』第九卷第一一号、一九二〇年) 二二—二三頁。
- (52) "In 1876, at the Centennial Exposition in Philadelphia, there was an exhibit of the house of Ginn. In walking about at the Exposition, Luther Mason came by chance to the Ginn exhibit, and happened to see a Japanese standing before the Mason charts and copying them. Mr. Mason introduced himself to the stranger, who told him that he had been sent by the Japanese Imperial government to see the exhibits, especially as they related to education. As a result of his visit, Mason was invited to go to Japan to revise the music system by introducing his musical scale in place of the scale then in use." Lawler, Thomas Bonaventure. *Seventy Years of Textbook Publishing, A History of Ginnand Company.* Boston: Ginn and Company, 1938, p. 55.
- (53) 阿部章蔵『阿部泰蔵一代記』(私家版) 一〇三丁。
- (54) 「海外留学生監督申報」(『文部省第四年報(復刻版)』宣文堂書店、一九六五年) 三八九頁。
- (55) 式部寮「明治十年雅楽録」所収の文部省字務課の依頼状。宮内省書陵部図書課公文書係り所蔵。
- (56) 明治十年公文原書自四月二十五日至二十六日 三十八、七十四丁。
- (57) 「往出第六百九十九号」明治十年公文備考往出十」
- (58) 安田寛「唱歌の起源—目賀田種太郎関係資料と唱歌掛図復元—」(『山口芸術短期大学』第二九卷、一九九七年)。
- (59) 塚原康子『十九世紀の日本における西洋音楽の受容』(多賀出版、一九九三年) 五六六頁。
- (60) 中村理平『洋楽導入者の軌跡—日本近代洋楽史序説』(刀水書房、一九九三年) 二〇八頁。
- (61) 塚原康子、同右。
- (62) 「京都女学校」給費生規則」添付京都女学校課業表』『徳重文書』(京都府立総合資料館蔵)。坂本清泉「女紅場の研究」(『大分大学教育学部研究紀要 教育科学』4(3)、一九七三年) 二二頁。
- (63) 澤崎眞彦『唱歌』解説』(大空社、一九九〇年) 六九頁。
- (64) Starkweather's letter to Miss Child, *ibid.* "You would enjoy hearing them as they sing "The Lord of the World

- is Jesus" and many other gems of Eng. & Japanese song. "Hold the Fort" in its new Japanese tongue is fresh and will wear a long time yet."
- (65) 坂本清晴「同志社女学校初代婦人宣教師 Alice J. Starkweather」(『同志社女子大学総合文化研究所紀要』第一二巻 一九九五年) 一六一—一七頁。
- (66) "I only teach one English lesson and give two music lessons a day as yet. I hope before long I do more, although of course I study Japanese three or four hours a day. On Sunday I go to the church which meets at Mr. Neesima's house. Miss Starkweather has her organ carried there for me to play." J. Wilson's letter to N. G. Clark, 1877, 10, 18 (Roll 6, 339).
- (67) 本井謙徳「母謙徳」六十四頁。"The third church, formerly meeting in Mr. Doane's old home, often much difficulty and opposition, rented a chapel last September in the very center of the city." Annual Report of the Kioto Station June 1, 1878 (Reel 327, Vol. 2, 48).
- (68) 本井謙徳「京都ノロヂスマンニテ母年表」(『京都のキリスト教』京都：日本基督教団同志社教会 一九九八年) 三三九頁。
- (69) Starkweather's letter to N. G. Clark, 1878, 2, 16 (Roll 5, 241): "We except to hold the same preaching service in this house until we move. Last Sabbath a. m. I had the pleasure of "opening" the portable organ you sent us, at the preaching place down in the (sic) center of the city. How grateful we all were for it, and how it drew."
- (70) 本井謙徳「母謙徳」五十四頁。"First I want to thank you for various things:—the organ, which you so kindly secured, has arrived and is now doing duty every morning in our school chapel at prayers—Miss Parmelee playing it—and is a great help in training the voice of our 100 young men in the service of sacred song. Then on the sabbath it is played at two services in the center of the city in our public preaching place." J. D. Davis' letter to N. G. Clark, 1878, 3, 8 (Roll 2, 299).
- (71) "The organ we ordered last spring arrived last week, having had a long voyage, but arriving in good condition. When Mrs. Learned is able to return here I trust we shall have much enjoyment from it. Such an instrument does much to brighten up a missionary's home where the mistress of the house has musical tastes." D. W. Learned's letter to N. G. Clark, 1878, 2, 19 (Roll 5, 107).

(72) D. W. Learned's letter, *ibid.*, "I am inclined however to doubt the expediency of furnishing them to our preaching places (except where as here the house is itself the place of preaching). To furnish an organ to the meeting-place of every church is more than the board ought to be asked to do it seems to me. My estimate of the value of the help of an organ in Japanese meetings has considerably diminished, and if this church move away from our house I shall not feel like sending an organ after them. Neither does it seem to me wise to encourage the Japanese to learn to play the organ till they know a good deal more about vocal music than they do now." 本井藏敏、大野馨、田岡眞。

(73) Starkweather's letter, *ibid.*, "You have heard of the difficulties attending the securing of that place. The church members under the lead of their temporary pastor my faithful teacher, labored long & patiently to obtain it. We hope his betrothed who has been eagerly drinking in the Truth and studying here since last April will hereafter go down there to play the organ. She has made most commendable progress."

(74) "Now she is able to go in the spirit of true devotion to the Master and play the organ for them at the preaching place in the center of the city where large crowds gather. Her faith is very beautiful to witness. It requires time for one such to learn to play and sing as sweetly as she, but one such witness to the possibilities for heathen women is worth ten sermons yes one hundred." Starkweather's letter to N. G. Clark, 1878. 3. 16 (Roll 5, 242).

(75) 田中不二麿「唱歌奏楽ノ教育ノ為メニ欠ク可ラサルヲ論ス」(『学芸志林』第二卷第九冊 一八七八年)一六一—一六三頁。  
(76) 安田寛、右掲論文参照。

(77) 坂本清音「草創期(一八七六年—一九〇〇年)同志社女学校の音楽教育」(『同志社談叢』第一八号、一九九八年)七三頁。  
Starkweather's letter to N. G. Clark, 1878. 7. 26 (Roll 5, 243). "This Okiku San was only 14 when she came to us one year ago. She soon developed a charming faith in Christ of whom she heard for the 1st time. Imagine an exceedingly lovably efficient girl at home of that age skillful in sewing apt at everything but all a waste with no soul yet developed not even the distinct knowledge that she had one and you see her in part. Now with a true faith she is helpful in many ways, sings & plays sweetly most of the hymns in our collection at the church down in the heart of the city."

- (78) 本間重慶、右掲論文、九頁。
- (79) 同志社社史資料室編、右掲書、三四一頁。
- (80) 西村菊の女学校入学時期については、『創設期の同志社』にある本人の回想記中の冒頭に「私は恰度六年間同志社に在學して居りました」とあることから、彼女の卒業年、一八八四年六月から逆算すると、一八七八年六月と推定される。しかし、一八七八年七月二十六日付のスタークウエニャー書簡では、「お菊さんが京都ホームに來たのは一年前の一四歳の時でした」となっているから、これからすると、一八七七年の入学と推定されることとなる。以上、坂本清音氏の教示。
- (81) 同志社社史資料室編、右掲書、九九頁。
- (82) Starkweather's letter to N. G. Clark, 1878. 10. 19 (Roll 5, 244). "My teacher was quite persistent in improving Mr. Doane's musical instruction."
- (83) Starkweather's letter to N. G. Clark, 1878. 8. 12 (Roll 32, 77). "A young married woman who came from Niigata 500 miles away to remain three years, studying the Bible, Eng. and music has been called home with her husband to enter into the harvest of souls there. The call was so pressing we could but bid them God-speed. They became Christians 4 yrs. ago and have been entirely cut off from their relatives, they not answering letters from them." Starkweather's letter to N. G. Clark, 1878. 3. 16 (Roll 5, 242). "No. 3 upon the other card you will know (?) by the style of her hair is a young married woman of 22 who comes with her husband (entering Training School) from Niigata 400 ms. away, under the patronage of Dr. Palm of the Mission sent out from Edinburgh. Their purpose was to remain here 3 yrs. studying Eng. and music."
- (84) 『岸和田教会百年史』(日本基督教団岸和田教会、一九九三年)。荻原俊彦「明治十年代泉州岸和田におけるプロテスタント伝道と土族信徒山岡尹方について」(『沢山保羅研究』第三卷、一九七〇年)一三二—一六三頁。
- (85) 山崎為徳「泉州岸和田伝道日記」(『七一雜報』明治十一年九月十三日)。“Some of “doshi sha” boys then went to Kishi no Wada during the summer vacation for sea bathing and one of their member taught the people Christian truth. Another taught the boys of the place to sing hymns.” M. E. Goudly's letter to Miss Halsey, 1879. 5. 13 (Roll 30, 91).
- (86) 『岸和田教会百年史』(日本基督教団岸和田教会、一九九三年)一九頁。
- (87) 溝口靖夫「近代日本におけるキリスト教の受容と神戸女学院」(神戸女学院百年史編集委員会編『神戸女学院百年史』各

繼)』一九二一年) 四三頁。

- (88) 「敬愛美保田君の哀状」(『ウレ報』西曆十一月十二日(十月十号))
- (89) Starkweather's letter to Dear friends all, 1879. 4. 5 (Roll 32, 83). "Mrs. Neesima accompanied two of our girls home to Kishiwada at the vacation. You remember that is the home of the young ex Daimio studying at Springfield (?) & how he requested a preacher to be sent to his home. Mrs. N. was quite delighted with the assistance they rendered even in explaining and talking to the people, and in singing they were quite useful. They entered the school last Sept. They also sang the Eng. songs "The Light of the World is Jesus," "Come to Jesus" & c. They love to sing here, to the great pleasure of the company. One of the girls is but ten yrs. very small & slight. The love of the Truth is evidently within her and helps her overcome her great natural timidity for Christ. They brought two new pupils with them on their return."
- (90) Starkweather's letter to Miss Child, 1878. 10. 4 (Roll 32, 78). "The letter from my teacher yesterday announces his arrival at Hikone at the head of Lake Biwa which Dr. Taylor first visited. He has been engaged to labor there a year supported by the people. They have no church there yet. Audiences of 200 have been gathering to hear. One man comes 9 miles every Sabbath to listen. Hikone promises to be a fine center for outstation work."
- (91) Starkweather's letter to N. G. Clark, 1878. 10. 19 (Roll 5, 244). "My teacher was quite persistent in improving Mr. Doane's musical instruction, and since going there teaches the children music every afternoon. He explains the Bible from 8-10 A. M. at his home (a physician's house). Teaching Eng. from 3-5 P. M. helps toward his support, and from 7-9 is preaching."
- (92) 我樂園 『西曆西報』西曆十一月十二日(十月十号) 一頁(一六号) 一頁(一六号) 一頁(一六号) 一頁(一六号) 一頁(一六号)
- (93) Starkweather's letter, *ibid.*, "The preacher's betrothed, in our school, plays nearly all hymns in church collection, very sweetly now."
- (94) Starkweather's letter to Mrs. Allen, 1878. 12. 20 (Roll 32, 79). "She helps much in the service by her good playing of the organ, and her influence everywhere is good."
- (95) Starkweather's letter to N. G. Clark, 1878. 10. 19 (Roll 5, 244). "One man has felt so eager to have an organ which

- I suppose he never yet saw, that he sold off household treasures, and clothing to the amt of \$40.00 and is inquiring if that will buy an instrument for the church they hope to form before long. He wants his wife & daughter to learn to play."
- (96) "I enclose this picture of one of those three 10 yrs. old, unusually large for her age. She is quite charming and is a Physician's daughter in Hikone, who will make her a special object of prayer? Her name is O Shige San." Starkweather's letter to Miss Child, 1879. 2. 24 (Roll 32, 81).
- (97) "These enterprising people have set four girls to the Kioto Home. They have also ordered from California one of Estey's Organs, for ninety dollars, and Mr. Honma writes that they "lengthen their necks" looking for it." "Letter from Miss Julia Gulick" *Life and Light for Woman* Vol. IX, No. 6 (1879):233.
- (98) 伊藤昌義『彦根教会略史』(彦根基督教会「一九二九年」六一七頁)。  
坂本清音「米国伝道会宣教師文書—A. J. Starkweather 書簡(二)—」(『同志社女子大学総合文化研究所紀要』第八卷一九九一年)一六七頁注(81)16参照。
- (99) J. D. Davis' letter to the Herald, 1879. 3. 24 (Roll 2, 335). "It was an inspiring sight to see the Sab. school its classes all taught by natives, and listen to the singing and especially to a new hymn which Mr. Honma had made and taught them to sing, to the music of "work for the night is coming".
- (100) 伊藤昌義「右掲書」一三頁。
- (101) 伊藤昌義「右掲書」九頁。新島襄全集編集委員会『新島襄全集 八年譜編』(同朋舎出版、一九九二年)一八八頁。
- (102) 伊藤昌義「右掲書」七一八頁。
- (103) 東京芸術大学百年史編集委員会『芸術大学百年史東京音楽学校篇第一巻』(音楽之友社、一九八七年)三頁。
- (104) 東京芸術大学百年史編集委員会「右同」二二七頁。坂本清音「草創期(一八七六年—一九〇〇年)同志社女学校の音楽教育」(『同志社談義』第一八号、一九九八年)七三頁。
- (105) Starkweather, Alice J. "Extracts from Miss Starkweather's Letters, Kioto, Japan, Feb. 1, 1879." *Life and Light for Woman* Vol. IX, No. 6 (1879):183-184. "One thing I am resolved upon: as many as possible shall become familiar with our best sacred songs. It does my heart good when I hear a happy voice here and there over house, at their

work or play, cheerfully singing. I wish those who say the Japanese cannot sing could be here sometime. The fortnightly praise-meeting is eagerly anticipated, and heartily enjoyed. "Though they may forget the singer, they will not forget the song."

(107) Starkweather's letter to Miss Child, 1879. 2. 24 (Roll 32, 81). "The organ sent me by Mrs. Richards of Cal. does help so much in the singing, and I know it would delight you as it does me to hear their voices unite in so many (ever-increasing) of our richest, oldest, and "Gospel Songs"."

(108) Starkweather's letter, *ibid.*, "The younger girls have of their own choice formed a prayer-meeting nightly after tea, and their glad voices sing out in song followed by the hush of prayer, most cheering to witness."

(109) Starkweather's letter to N. G. Clark, 1879. 5. 22 (Roll 32, 85). "Mrs. L. and I try to call on the church [centre] and such time as I can possibly spare, I sing and talk [with] children: taking my organ to the preaching near here, [right in] the street. Quite a crowd gather, and I am pleased to see bright children turn from the variety of pictures and play, and ask eagerly for hymn-books, and being learning 'Jesus loves me' and 'A Happy Land.' Their teachers in the public school are always kind to me, but I have never yet had time to visit the school, as they have often asked me to do."

(110) 「同志社視察ノ記第三回 明治十二年九月」(京都府立総合資料館蔵『徳重文書』)

(111) "Returned to U. S. June 1877; re-emb. San Francisco Oct. 1, 1878" "Marquis Lafayette Gordon." In Vinton Book Vol. 1, 82.

(112) 「同志社視察ノ記第四回 明治十二年十月」

(113) M. L. Godon's letter to N. G. Clark, 1879. 10. 17 (Roll 3, 149). "We lately had a visit from two officials of the Kyoto Ed. Department. We pressed them into dining with us, and in other way showed them marked favor. So that they went away more friendly rather than otherwise."

(114) 「同志社視察ノ記第八回 明治十二年二月」

(115) 「同志社視察ノ記第十四回 明治十三年十月二十八日」

(116) 坂本清音「草創期(一八七六年—一九〇〇年)同志社女学校の音楽教育」(『同志社談叢』第一八号、一九九八年)七五一

- 七六頁。
- (117) 坂本清音「米國伝道會宣教師文書—A. J. Starkweather 書簡(四)—」(『同志社女子大学総合文化研究所紀要』第十卷、一九九三年)七一頁。
- (118) 「同志社視察之記第廿二回 明治十四年六月廿一日」。
- (119) 神戸女学院五十年祝賀會「創立五十年神戸女学院史」(一九二五年)一四頁。
- (120) N. G. Clark's letter to Talcott (Reel 29, Vol. 76, 558). "Mr. Hutchins called my attention a few days since to you request for an organ to be sent one for your institution. I was suffering that you had one already, and was quite surprised at the request. However I at once spoke to Mr. Smith, my friend who so generously supplies instruments on my call, to send you out a first class instrument by the first opportunity. He will take pain to have it constructed of such material as will endure the damp, moist climate which I understand must be guarded against at Kobe. I am really sorry you have not had an instrument sooner."
- (121) 若山晴子、鈴木恒弥「タルカッタ書簡—訳をよむ註(二)—」(『神戸女学院大学論集』第二五卷第三号、一九七九年)一四二頁。E. Talcott's letter to Ward, 1878. 3. 29 (Roll 6, 323).
- (122) 佐伯睦、覚道光子「クラークン書簡—訳をよむ註(一)—」(『学院史料』第一卷、一九八三年)七一頁。V. A. Clark-son's letter to Mrs. Trowbridge, 1878. 6. 14 (Roll 2, 150).
- (123) 吉年トウ子、山本純子、若山晴子「マリアン書簡—訳をよむ註(四)—」(『学院史料』第四卷、一九八六年)四三頁。V. A. Clarkson's letter to N. G. Clark, 1881. 1. 18 (Roll 11, 346).
- (124) 同上、四七頁。V. A. Clarkson's letter to N. G. Clark, 1881. 1. 18 (Roll 11, 347).
- (125) 同上、五〇—五二頁。V. A. Clarkson's letter to N. G. Clark, 1881. 2. 8 (Roll 11, 348).
- (126) 吉年トウ子、佐伯睦「マリアン書簡—訳をよむ註(五)—」(『学院史料』第五卷、一九八七年)四〇頁。V. A. Clark-son's letter to N. G. Clark, 1881. 8. 17 (Roll 11, 351).
- (127) 吉田真紀「クラークン書簡始末その(三)クラークン書簡その後」(『学院史料』第六卷、一九八八年)三八—四七頁。坂本清音「明治一八年事件後の同志社女学校」(『同志社女子大学総合文化研究所紀要』第二三卷、一九九六年)七五—七八頁。

(23) A. M. Colby's letter to N. G. Clark, 1880, 3.26 (Roll 11, 524). "Mrs. Curtis teaches music, and now that the government have hired an American gentleman to teach this art this have become an important element. (廿三) Do you know whether Mr. Mason who has come to teach singing is a Christian? Pray for us that the foreigner whom the government employ may be true Christian men. It seems me that this is more important for this country than sending missionaries. Do not forget this when you pray for us missionaries."